

【研修報告】

平成22年度 米国国際看護学演習を通して 看護学教育の視点からの学び

藤 原 み の り

I. はじめに

私は看護教員として、如何にすれば、学生に看護学の奥深さを伝えることができるのか、同様に、如何にすれば学生が看護学へ興味関心を抱くことができるのか、また、ケアリングの真髄とは何なのかを、日々模索している。

今夏、8月17日から30日の2週間、米国国際看護学演習に参加する機会を得た。その中で、コロラド大学看護学部での講義や演習、及び大学関連病院施設の見学を経験し、米国における看護学の教授方法や、教育研究者としてのどのように教育・研究・実践を統合するのか、ケアリングの真髄について新たな視点を得ることができたので、以下に報告する。

II. コロラド大学の紹介

コロラド大学看護学部はコロラド州デンバーに位置し、1898年に創立され、4年制大学としては米国中西部で最も古く歴史ある大学である。小児看護学におけるNurse Practitionerの教育プログラム構築や、ケアリング理論の世界的権威者であるDr.Jean Watsonが世界初のヒューマン・ケアリング・センター創立を先駆的に行った大学である。US News & World Reportでは米国国内大学のランキング15位(2010)とされ、看護学部においても高い評価を得ている、米国でも屈指の大学である。

III. 学生への教授法

今回の大学講義の中で、高齢者の感覚機能を疑似体験する演習があった。その演習に用いられたのは、ゴム手袋などの非常に身近な物を工夫した、教員手作りの道具であった。身近にあるものだからこそ、それらが感覚機能に及ぼす影響の程度を予測・想像でき、ケアを考えることができるのではないだろうか。学生の予測力や想像力を刺激し、興味関心を持つことができるような工夫をすれば、高額な物を使

わなくても十分に学生の良い学びとなるのである。同時に、教員の手作りという点で、学生は教員からの愛情を感じ、学習が深まる一端になると考えられる。

そして、どの講義においても、教員がスライドを使用し一方的に話しをするという一方通行の講義形態はなく、表情豊かに、身を乗り出して学生に問いかけ、学生が考え言語化するという、双方向の講義であった。学生が言語化したことに対して耳を傾け、一つの意見として受け入れる姿勢を教員が持つことの重要性を再認識した。この様に学生へ関心をもつ姿勢は、学生自身が他者から必要とされていると感じ、自ら考えることや、言語化することに対する自信へと発展するであろう。

学生が傍観者にならず、全員が参加できる生きた講義が繰り広げられると、自分の意見を他者へ伝えるために熟考をし、意見を聞いてもらうことで、今度は他者の話に耳を傾けるようになり、再度学習するという良いサイクルが生じるのではないかと考えられる。

IV. 教育研究者としての、教育・研究・実践の統合

小児看護学の教員は、臨床にて週に2～3日、受け持ち患者へのケア実践をしており、「子どもたちと一緒にいることがとても楽しい」と笑顔で生き生きと語っていた。教員が、実際の看護実践を学生へ生きた言葉として語ることができるということは、学生は看護実践を身近に感じることができ、学習意欲が刺激される有効な教育となるのではないだろうか。また、その教員は、臨床を研究のフィールドとしても活用しており、研究結果を臨床で実践するという、教育・研究・実践の統合がなされていた。私自身も精神看護学実習において学生を指導しながら、学生の学習意欲を刺激できるような看護実践能力を備えていき、それらを研究へ反映し、教育と研

*日本赤十字広島看護大学

究を実践に統合していくことが、看護学発展の一端を担う教育研究者としての在り方であると再認識した。

V. 看護学教育におけるケアリングの真髄に触れて

1. ケアリングの真髄

今回の演習では、Dr.Jean Watsonの講義を受講する機会を得た。Dr.Watsonは講義の最中、学生の様子を鋭く察知し、その様子に合わせて、全員が講義へ参加できるよう、演習へと授業形態を柔軟に変化させ、学習内容が深まるように配慮していた。学生たちは机から離れ円座になると、互いの顔を見合わせ、各々の考えるヒューマン・ケアリングとは何か、自己の意見を述べて、ディスカッションを深めた。この様な臨機応変な対応は、学生へ関心があるからこそできることであり、教育におけるケアリングの実践がなされていた。

この様子を目の当たりにして、私は学生に関心や愛情を持つことの重要性を改めて実感した。私自身が関心・愛情を持って接し、学生に心を開くことで学生も反応し、その反応から、学生が何を感じ考えているのかを理解ができ、個性のある関わりが生まれ、それがケアリングとなるのである。教育におけるケアリングの真髄を肌で体験した、貴重な時間であった。

2. 学生の成長を見守る教員の姿勢

本演習に参加し、コロラド大学の教員やスタッフの学生への教授方法や関わり方、学生の様子を垣間見ることで、教員としてのあるべき姿勢を再考することができた。

それは、学生の成長過程において、教員が全てを補うのではなく、学生の力を信じ、自主性を尊重し見守る姿勢を持てば、教員に言われずとも、学生は自ら考え、生活における自己管理や、他者への配慮ある行動、積極性・自主性のある行動がとれ、成長していくことが可能となるということである。そして、それは、如何に教員が愛情や心の平静さを持っているかで、学生の様子も変化してくる。教員がケアリングの心を持って関われば、学生もケアリングの心を持つことができるようになるだろう。教員としての姿勢は、学生の学びに多大な影響力があると、再認識することができた。

3. 背中が語る看護

本演習で、大学関連施設であるMedical Center of Auroraの見学機会を得た。Medical Center of Auroraは、Dr.Watsonのケアリング理論を取り入れ

た、米国でも有数のマグネットホスピタルであり、コロラド大学卒業の看護師が数多く活躍している。その見学时、学生たちは“看護師が楽しそうに仕事している！”と感嘆の声を上げていた。ゆったりと、広々とした病棟では、殺伐と忙しく動くスタッフは見られず、笑顔がありユーモア溢れ、スタッフ間の会話が飛び交っており、夫々がやりがいと自信を持ってケア実践をしている印象を受けた。これは、ヒューマン・ケアリングがスタッフへ根付いているからこそその姿であるのだろう。これを受けて、私自身が、看護にやりがいや楽しみ、興味関心を持ち取り組む姿勢を見せることで、それを学生が感じ取り、学生自身の興味関心へ繋がると感じた。背中が語るとは、まさにこのことだと実感した瞬間だった。

VI. おわりに

私は以前、本学の学部生として、Dr.Watsonからヒューマン・ケアリング理論について聴講する機会があった。その頃の私には、抽象度が高く非常に難解であり、看護実践と結びつけて考えることが困難であった。その後、臨床経験を経て教員として大学へ着任してから、ケアリングを構成するカリタスプロセスについて触れる機会が増え、興味関心を持つようになったが、ケアリングの実践はどの様にしてなされるのか、不明瞭であり模索する日々だった。しかし、今回この様な貴重な機会を得て、看護学教育におけるケアリングの実践とその真髄に触れることができた。この経験をこれからの精神看護学実習や学生への関わりに生かし、学生がより看護学へ興味関心を持ち、ヒューマン・ケアリングの実践者となるよう、微力ながら看護学教育の一端を担っていききたい。

謝 辞

本演習への参加にあたり、貴重な機会を与えて下さった先生方、ともに学んだ13名の学生へ感謝致します。また、日本赤十字広島看護大学より海外旅費助成を受けて参加致しました。貴重な機会を与えて下さいました本学に深く感謝申し上げます。

参考文献

- Jean Watson (2000) トランスパーソナルケアリング理論と実践の再考. 日本赤十字広島看護大学紀要, 1, 3-9.
- Jean Watson/戸村道子訳 (2010) ヒューマン・ケアリング理論：理論の核とカリタスプロセス. 日本赤十字広島看護大学紀要, 10, 77-80.